

第四十二回和作忌協賛街頭展

日本画壇の超俗孤高の伝説的人物で、色彩の魔術師ともうたわれた小林和作が没した時、中川一政はいみじくもこう言った。「樹が倒れたようだ。その倒れたあとと空間に青い空が見える……」。

和作が逝つて既に四年、あれだけ多作した夥しい作品が、殆ど画商など市場に出て来ないのはどうしたことだろう。言うまでもなく和作の作品の持ち主たちが、手放そうとしないからではあるが、その理由は、一つには作家が人生に花をみた明るさに包まれていること、一つには作品の向うに和作の姿をみてのものと考えられる。位牌を仰ぐ思いで壁面の作品を見詰めている人間が大ぜいいるのだ。

高橋玄洋著「評伝小林和作」より

尾道の芸術文化を遺された尾道市頭彰するため、中心とした和作忌力し、西國寺に墓碑（中川一政筆）を建立、懇ぶ会を開催し、今年、1・5キロもシヨーウインドウで最初の街頭展をの法要、懇ぶ会、街継承されています。本年で四十三回頭展は、尾道美術友会の協力を得て



「私は昔は金持だった時代もあり、また没落して貧乏したこともあるので、金銭については他の人とはちがったはっきりした観念を持っている。その金を溜めないでばら撒いて、私の一族や若い友人たちを潤すことにしている。それで私は微力ながら花咲翁的人気があるらしい。考えてみれば、世の中は何をしてもたいした面白いことはないが、中で人の慶ぶ顔を見るのが第一ではないかと思うがどうだろうか。」

私はかくて多作家であり、乱作家だという評判が東京辺で立っている由だが、少しも恐れていない。要は絵が良いか悪いかか第一の問題であろう。一部の日本画家たちのように駄作のできることを極度に恐れて、戦々兢兢として絵をかくのは愚であるので、私は臆せずに絵をかく。それがために老来多少の進歩もしているらしい。自惚れかも知れないが七十歳以上の画家でまだ将来の飛躍を楽しめるのは私一人ではないかと思う。

昔から「一人出家すれば九族天に生ず。」という言葉があるが、私の場合は、「一人が多作すれば四隣が潤う。」ことになるので、田舎人と調和して生きて行くことに専念している私としては、最も必然的な生き方も知れぬから了解して頂きたい。私は画家としての私よりも、四隣の人々に愛される人物であることを切望する一個の俗人だからである。」

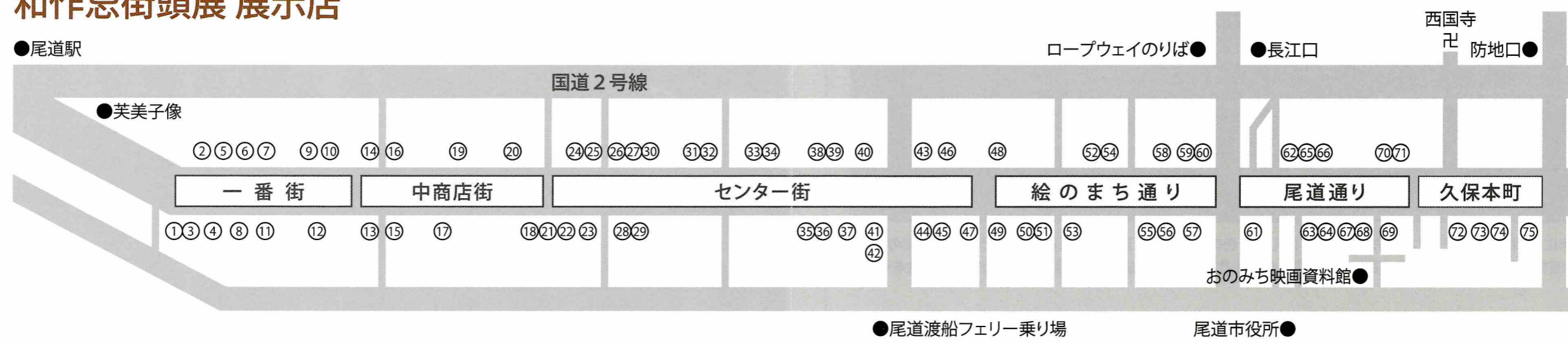
「尾道へ来てから四十年になるが、その後の私は財産は激減したので、今迄通りに遊んではかりいては生きて行けないので、そこで、始めて目を覚まして本式に絵の勉強をすることにしました。風景画家である私としては、勉強法の第一歩は、美しい風景を入念に写生しつづけて、自然の構成や色彩を徹底的に知ることにあると悟ったので、その後はその方法でとにかく真剣に勉強した。」

その辺で天助を得たものか、私は画家としての地位をやや確立し、年齢も今は八十六だが、割合に健康で大体絵も毎日かいている。

尾道へ移り住んで以後の私は、だんだんに一種の悟りを開いて、絵の上では東京辺の先輩や友人たちの影響を離れて独立すること、絵の第一歩は構図だと思って、美しい構図を捜し廻ることに努力した。そのために、私はその後三、四十年の間に、日本全国の海や山の名所は大抵歩いて、紙に鉛筆で入念に写生し、それに水彩で着色する私流の写生画を作って廻った。それが異常に熱心であったので、私の手許には、その方法での写生画が一千枚以上も残っている。これが他の先生方の影響からだんだんに離れて行って、所謂、地方での土着画家、或は民衆画家としての地位を確立しつつある。

これでよいのかどうか知らぬが、他に仕方がないから当分はこのままで行くつもりである。」

和作忌街頭展 展示店



一番街

- ① 中華そば日乃出食堂 横田 招
- ② 藤原茶舗 宮谷 順子
- ③ バッグのコムロ 岡本 萩子
- ④ 市川呉服店 住田 哲博
- ⑤ 杉原薬局 平田 泰子
- ⑥ 東洋堂スポーツ 山口 信哉
- ⑦ くいしんぼう千両 吉田 憲雄
- ⑧ かめだ 三島 忍
- ⑨ 勉強屋 平籐 初代
- ⑩ 浜だんな 池田 睦代
- ⑪ ととあん 上石 田勲
- ⑫ マサヤ靴下専門店 河原 厚子

中商店街

- ⑬ 桂馬蒲鉾商店 和田 園枝
- ⑭ 駒や 岡田 眞由美
- ⑮ ミシンのマツカワ 平田 泰子
- ⑯ 佐藤苔助備前焼の店 村上 選

センター街

- ⑰ 三井住友銀行 妹尾 宏
- ⑱ 尾道商業会議所記念館 村上 選
- ⑲ 仏壇店 古川 瀬山 清三
- ⑳ もみじ銀行 城本 満弘

センター街

- ㉑ あいさーQ 坂上 正樹
- ㉒ ブルックリン 迫 清博
- ㉓ コーヒーポット 竹森 勅彦
- ㉔ ビーツー 瀬山 清三
- ㉕ ゆーゆー 堂岡 悟
- ㉖ Fit Fix 堀 純子
- ㉗ ヤマト運輸(株) 武田 昭博
- ㉘ アリア 坂上 弘子
- ㉙ はとキッチン 岡本 萩子
- ㉚ おみぢエターマーケット 住田 哲博
- ㉛ 上野屋美香園 島田 晃
- ㉜ 宝石のモリシタ 山根 悦
- ㉝ 松岡服地店 土本 正治

絵のまち通り

- ㉞ ヤマダヤ 恵谷 俊彦
- ㉟ ミハルススポーツ 木梨 修
- ㊱ ウエダ靴店 中間 良子
- ㊲ D a n j o 山根 悦
- ㊳ 中川硝子店 後藤 時子
- ㊴ クロダ洋服店 宮谷 順子
- ㊵ はきもの あぼ 迫田 芙佐子
- ㊶ 尾道帆布彩工房 恵谷 智恵里
- ㊷ 松愛堂 筒井 宏
- ㊸ Sora-studio&gallery- 堂岡 悟
- ㊹ BETTER BICYCLES 諫見 久恵
- ㊺ エイカ玩具 松浦 暁美
- ㊻ 尾道郵便局 上杉 聖子
- ㊼ 広島銀行 小林 和作
- 塔尾 葉莉

絵のまち通り

- ㊽ 工房尾道帆布 和田 園枝
- ㊾ みさか 佐藤 圭史
- ㊿ ラ・モード・パリス 松原 順一
- アオキ洋服店 北川 祐子

尾道通り

- ㊽ 寺山眼鏡店 村上 勝子
- ㊾ ハニーズ 島田 晃
- ㊿ カモン時計店 村上 圭示
- ㊽ 尾道浪漫珈琲 梶田 憲弘
- ㊾ 尾道ええもんや 碓木 學
- ㊿ ドッグ・ポウ 唐崎 晃
- ㊽ Salon de 憧夢 高田 三徳
- ㊾ 油 岩 上野 重治
- ㊿ 梶田時計店 小島 哲

尾道通り

- ㊽ 三上酒店 沖浜 忍
- ㊾ ベニヤ結納 妹尾 宏
- ㊿ パリゴ尾道本店 戸田 匠
- ㊽ ノアズ・アーク 上杉 聖子
- ㊾ アプコセンター薬局 竹森 勅彦
- ㊿ ヨシナカ靴店 濱本 和信
- ㊽ 秋元洋服店 杉原 秀樹
- ㊾ 喫茶てまり 武田 昭博
- ㊿ 尾道造酢 石森 啓司

久保本町

- ㊽ タケケニ化粧品 梶田 憲弘
- ㊾ 喫茶くるみ 濱本 和信
- ㊿ 砂田酒店 北川 祐子
- ㊽ 小泉和楽器店 沖浜 忍
- ㊾ 高尾生花本店 三島 忍
- ㊿ すずきメガネ 佐藤 圭史

※左は〈展示店名〉、右は〈出展作家名〉です。

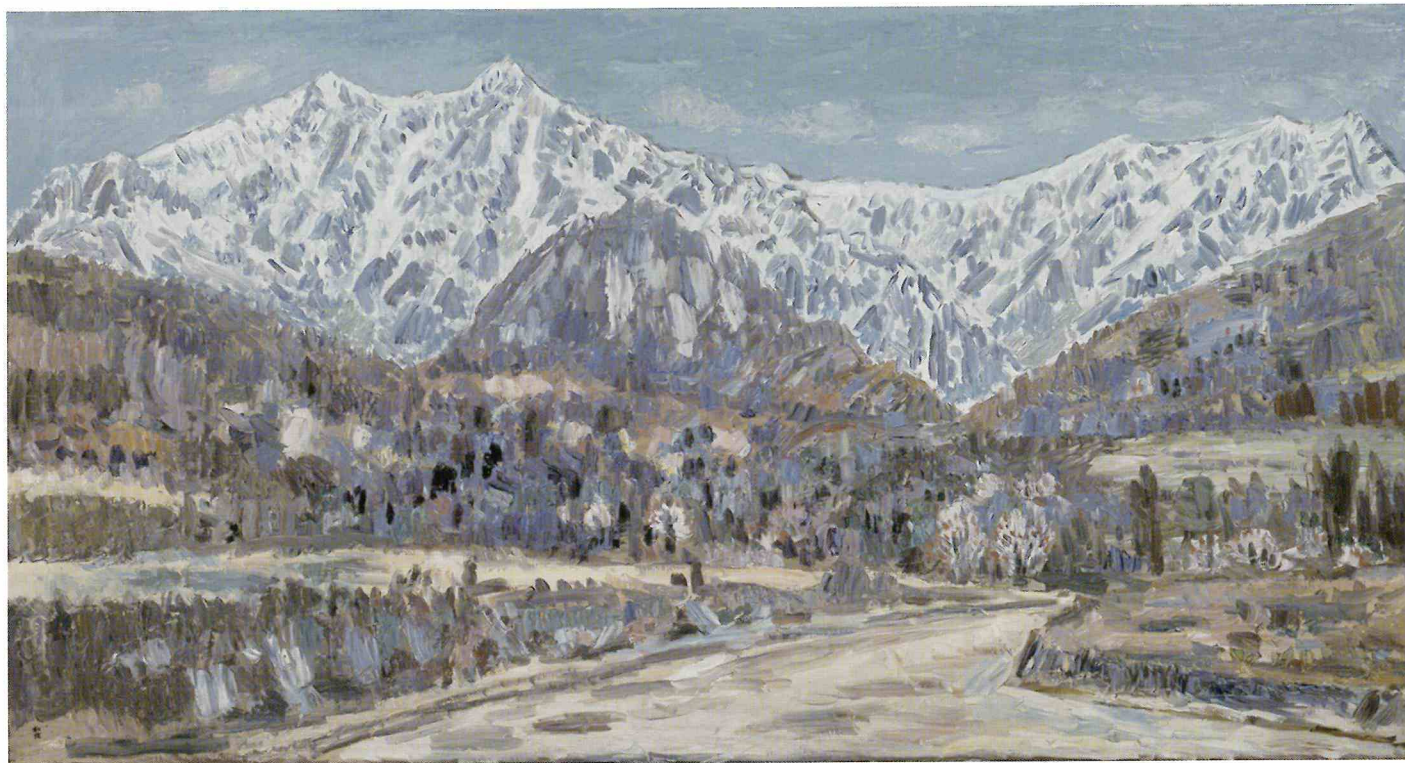
平成30年
11/2 [金]
-11/11 [日]

尾道市立美術館展覧会のご案内

生誕 130 年記念 「旅する文人 小林和作」 (市制施行 120 周年記念展)

和作最大級 100 号の油彩画が、20 年ぶりに里帰り！

「雪の山の春」



生誕 130 年の記念すべき年に、小林和作を尾道に訪れた文人として捉え、「萬巻の書を読み 萬里の道を行く」という文人の理想の旅を、尾道を拠点に実践した小林芸術の作品 90 点の展覧を通じて、人間・小林和作の魅力に迫ると共に、尾道との出会いの必然性も感じていただければ幸いです。

会 期：平成 30 年 9 月 22 日 (土) ～ 11 月 18 日 (日) 休館日：月曜日 [10 月 8 日 (月・祝) は開館]

観覧料：大人 / 800 円、高大生 / 550 円、中学生以下無料



小林和作 こばやし わさく 明治 21 年 (1888) - 昭和 49 年 (1974)

山口県吉敷郡秋穂村 (現 山口市秋穂) に生まれる。日本画家を志し京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校で学ぶ。大正 2 年 (1913) の第 7 回文展に「志摩の波切村」が入選し褒状を授与される。やがて洋画に興味を示すようになり、大正 11 年 (1922)、洋画家へ転向を決意して上京する。梅原龍三郎、中川一政らの影響を受け、春陽会会員となる。昭和 9 年 (1934) から画業の過半を過ごした尾道に転居、独立美術協会会員となる。転居直後は尾道周辺の風景を中心に描くが、自然の風景 (構図) を探し求めて、毎年春と秋に日本全国に写生旅行に出かけるようになり、やがて美しい色彩や構図をした独自の風景画を完成させた。昭和 28 年 (1953)、芸術選奨文部大臣賞を受賞。昭和 53 年 (1978)、尾道市名誉市民となる。

お問合せ：尾道市立美術館 Tel.(0848)23-2281 〒722-0032 広島県尾道市西土堂町17-19 千光寺公園内 協力／和作忌協賛会

和作忌の関連行事のご案内

◎第43回和作忌協賛街頭展 オープニング・セレモニー

日時：2018年11月2日(金) 9:30～9:50 / 会場：一番街入口(美美子像のところ)

◎第44回和作忌 法要及び偲ぶ会

日時：2018年11月4日(日)14:00～16:00 / 会場：西國寺 / 無料(ご自由に参加できます)

○偲ぶ会 講師：高橋玄洋先生 テーマ「米寿を過ぎて今思うこと」

【高橋玄洋 Genyo Takahashi プロフィール】

1929年松江市に生まれる。尾道で画家小林和作に出会い強い影響を受ける。早稲田大学文学科を卒業後、日本教育テレビ(現 テレビ朝日)の嘱託作家として活躍。1960年『傷痕』が芸術祭奨励賞を受賞後、フリーとなり作家活動に専心する。最盛期には、年間100本のドラマ脚本を書き「視聴率の魔術師」と呼ばれたが、1980年頃、テレビ脚本家としての栄光を手放し、現場を離れ、小説や随筆、書、陶芸などの制作活動に勤しむ。1999年勲四等旭日小綬賞受賞。



高橋玄洋

主催／和作忌協賛会、尾道商店街連合会 共催／尾道美術協会、チャータール会、佯友会

後援／尾道市、尾道市教育委員会、尾道市文化協会、尾道商工会議所、(一社)尾道観光協会、山陽日日新聞社、ちゅびCOMおのみち、尾道エフエム放送 写真提供／尾道市立美術館